

## 地域産業についての教育・研究と私

阿部 聖

### On My Research and Teaching about the Regional Industry

Sei Abe

#### はじめに

2011年に地域政策学部がスタートした時、私は経済学部からの移籍者の一人として同学部の構成員となった。移籍の理由は、家のある掛川から名古屋まで通うのは距離的にちょっと無理というものであった。専門が日本経済史ということもあり、とくに移籍を要請されたわけではなく、ついでにお願いできればという感じで移籍に立候補したように思う。それに緑に囲まれた豊橋校舎のたたずまいが好きで、これを捨てるのはもったいないという気持ちと名古屋駅周辺の喧騒には耐えられないだろうという思い込みもあった。地域政策学部では、経済学部時代とは授業の雰囲気はかなり違い多少とまどった面もあったが、しだいに慣れてきたように感じている。今から思えば、仕事が増えたことを別にすればだが、移籍という選択は正解だったように思う。以下では、とくに地域政策学部での担当科目であるゼミナールと地域産業史を中心に経済学部時代まで遡って、私と地域産業教育・研究とのかかわりについて紹介してみたい。

#### (1) 経済学部時代

##### ①ゼミナール

私は2001年4月に愛知大学経済学部で日本経済史の担当者として赴任した。その頃、経済学部は、廃止された教養部の人文系や理系の教員を多く受け入れていて、それにもなつて学部内のコースも、私の記憶では、理論・情報コースや国際経済コースなどに加えて、地域研究コース、社会政策コース、環境コースなどに別れていた。私は、地域研究コースの一員となり、間もなく募集を開始したゼミナール

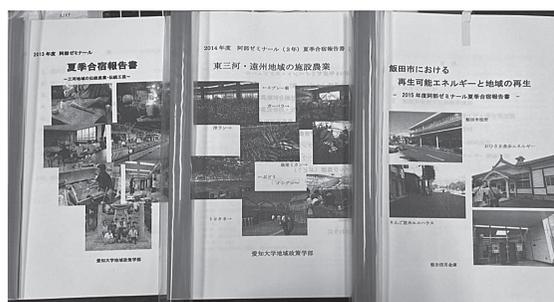
のテーマは「東海地域における産業の歴史と現状」とした。このことが、その後の地域政策学部への移籍の際にもそれほど大きなストレスを感じなかった理由だったように思う。前任校は静岡県浜松市にあり、同地域の繊維産業や楽器産業などについて浜松地域の大学教員たちと研究会や見学会などの経験があった。とはいえ、愛知県の地場産業についてはほとんど知識がなかった。このため、私自身の勉強も兼ねて、夏のゼミ合宿等を利用してできる限り東海地域の工場や関連施設を見学し、関係者にインタビューして、報告書にまとめることを目標にした。

幸いなことに2003年度以降の経済学部時代の報告書(残念ながら2003年、2004年、2008年の報告書は不明)と訪問先の資料が残っていて、それらから判明する訪問先を以下に示す(第1表)。経済学部時代は3年次については、毎夏、2泊3日のゼミ合宿を実施していた。毎年度、地域産業に関連するテーマを決めて数カ所の工場や施設を見学した。まず、テーマに即した訪問先を学生に調べさせ、そのなかから見学可能な企業にそれぞれ責任者を決めてアポイントをとらせた。これらの作業が最も時間がかかったように思う。訪問先が決まると、訪問先の事前調査をもとに質問事項を整理し、それを担当学生に訪問先へ送らせた。当日はICレコーダーで、インタビューの内容を録音させた。最初は録音にテープレコーダーを使用していたが、使い方を知らない学生が増えたことや、テープレコーダー自体手に入れるのが困難になり、途中からICレコーダーに切り替えた。

録音テープは、秋学期に学生が分担して文字に起こして、それをもとに訪問先の事前調査を加えて報告書(写真)を作成していった。テープから聞こえ

第1表：経済学部時代の夏合宿の工場見学先（ゼミナール3年次）

年度	テーマ	見学先
2002	美濃地域の伝統産業	産業技術記念館，美濃和紙（澤村工房），美濃和紙会館（紙漉き体験），美濃陶芸村（陶器作り体験），美濃焼伝統産業館
2003	尾張地域の代表的企業	国盛酒の文化館，建設中のセントレア空港，中京コカ・コーラボトリング，ノリタケクラフトセンター，産業技術記念館（トヨタの技術）等
2004	知多・三河の自動車産業	中央可鍛工業（ブレーキ部品，日進市），JFE 知多製造所（鋼管），デンソーギャラリー，愛知県陶磁器資料館，トヨタ会館（同社人事課と学生の懇談会），トヨタ自動車堤工場
2005	遠州地域の代表的企業	ヤマハ（ピアノ），武藤染工（注染，浜松），ポーラ化成工業袋井工場，本田技研工業浜松工場（オートバイ），スズキ湖西工場等
2006	岐阜の伝統産業を訪ねる	岩崎模型（食品サンプル），美濃和紙（澤村工房），岐阜県刃物会館前（関市環境経済部工業振興課のお話），関鍛冶伝承館，岐阜県陶磁器工業協同組合連合会（絵付体験），千窯（窯元）
2007	豊橋・田原地域の農業の現状	愛知みなみ農業協同組合赤羽支所，トマト・メロン農家（鈴木正晴農場），イシグロ農材試験農場（トマト，イチゴ，ガーベラ等），イシグロ農材本社，東海有機（うずら），同社大清水の養鶏場
2008	三河の食品産業を訪ねる	菓子蔵関（あさり煎餅，田原），平松食品御津工場（佃煮，豊橋・豊川），ヤマサちくわ（豊橋），まるや八丁味噌（岡崎），青山（えび煎餅，一色），デンパーク，七福醸造（白醤油，碧南），九重味噌（碧南）
2009	三河湾の漁場と養鰻業	千春うなぎ（うなぎ輸入，田原），夏目商店（うなぎの養殖・販売，豊橋），豊橋養鰻漁業協同組合，愛知県水産試験場内水面研究所（うなぎ研究），一色うなぎ漁業協同組合，一色漁港・西三河漁業協同組合（せりの見学）
2010	東三河と遠州の繊維産業	三河織物工業協同組合，小森（繊維商社，蒲郡），丸奈（カーテン製造，豊川），石田製綱（ロープ製造，蒲郡），静岡濾布（和紙タオル，浜松），遠州織物工業協同組合，二橋染工（注染，浜松）
2011	東三河と遠州の繊維産業（続）	三河繊維技術センター，藤浜染工，中瀬織布，福井ファイバテック（漁網等），古橋織布，池沼織工房（紬織），ぬくもり工房（繊維商社），星野秀次郎工場（コール天），天龍社織物工業組合，阿部美治工場（別珍）
2012	三河港の現状と将来展望	三河港振興会，日本ジュースターミナル，愛知海運産業，トヨタ自動車田原工場，フォルクスワーゲンジャパン，名古屋税関豊橋支署，千春うなぎ（うなぎ輸入）



写真：地域政策学部の初期のころのゼミ報告書

てくる声を文字に起こすには、日本語や業界用語などがある程度理解していることが必要となる。学生たちにとっては意外と勉強になったのではないかと、勝手に考えている。学生たちが起こした文字を読み直して校正し、注を入れる作業は私の役割で、大変だったが、私にとってもいい復習にも、勉強にもなった。

第1表にあるように、1日に2社から3社、2泊3日で5社から7社訪問していたので、今から考えるとかなりせわしない調査活動で、昼ごはんはコンビニで弁当を買って車中で食べるなどした。学生も

かなり疲れていたように思うが、宿泊先は夕食付きの旅館にしている、多少は学生たちの努力を労ったつもりである。その後、久々にゼミの卒業生に会ったおりなどに、ゼミ合宿が、その大変さもふくめて、懐かしい思い出になっていると言ってもらったりと、お世辞でも嬉しくなってしまう。

経済学部時代の合宿で記憶に残っているのは、遠州および東三河の繊維産業の調査とうなぎ養殖をふくめた水産・食品産業の調査である。学生との調査の様子や結果については、豊橋市民トラムや吉良町市民講座などで使わせてもらった。

## ②地域産業史

経済学部にて赴任して数年ほどして日本経済史の他に地域経済史も担当することになった。ゼミナールで「東海地域における産業の歴史と現状」をテーマに調査活動をしていたこともあり、その歴史についても多少蓄積があった。地域経済を地域産業に読み替えて、あとはできるだけ資料を収集し、授業内容をどう構成するかであった。資料は、県史、市町村史、郡誌、産業史、社史、そして愛知県統計書をはじめとする府県統計書などを調べた。授業内容を構想する上でとくに参考になったのは、杉浦英一『中京財界史(上下)』(中部経済新聞社、1956年、同書は1994年に文春文庫から『中京財界史-創意に生きる』として復刻された)や玉城肇『三河地方における産業発達史概説』(中部地方産業研究所、1955年)他、山口和雄『明治前期経済の分析』(東京大学出版、1956年)などである。周知のように杉浦英一は後に城山三郎のペンネームで経済小説家として活躍した。私の好きな作家の一人でもあった。その当時、杉浦は愛知学芸大学等で経済概論や景気論などを教えていた。玉城肇はいうまでもなく初期の愛知大学法経学部の日本経済史担当の教員であり、『日本財閥史』等の他、ペリーの『日本遠征記』やハリスの『日本滞在記』などの翻訳もある。

地域産業史のシラバスは何度か変更しているが、大きくは変わっていない。対象は中京経済圏で対象時期は明治から昭和初期までとした。この時代の中京経済圏の形成過程を考察することで、その後の「ものづくりのメッカ」としての基盤が明治初期にどの

ように形成されていたのか、そしてその後、世界的な工業集積地がどのように形成されたのかについて考えるということにした。最近の授業スケジュールを示すなら以下の通りである。

- 第1回 はじめに-テーマ・内容と注意事項
- 第2回 産業化と地域経済-対象と方法
- 第3回 地域社会の変化①(人口、労働者数)
- 第4回 地域社会の変化②(生産物とその価格)
- 第5回 産業革命と地域(会社数、資本金)
- 第6回 企業勃興と綿紡績① 二千錘紡績とガラ紡
- 第7回 企業勃興と綿紡績② 大規模紡績業
- 第8回 近代化と在来産業の展開① 製糸業
- 第9回 近代化と在来産業の展開② 醸造業
- 第10回 産業基盤の整備① 鉄道業
- 第11回 産業基盤の整備② 電力産業
- 第12回 新たな産業の生成・発展① 機械工業
- 第13回 新たな産業の生成・発展② 食品産業
- 第14回 近代化と在来産業の展開③ 綿織物業
- 第15回 近代化と在来産業の展開④ 陶磁器産業

授業の準備をする過程で新たに気づかされたことが少なくない。例えば、明治初期の産業構造である。山口和雄、前掲書の「明治7年府県物産表(全国)」(ただし、引用は長岡新吉『近代日本の経済』ミネルヴァ書房、1988年)を示すと、第2表の通りである。全国の生産価格計は、3億7,230万6,974円で農産物、工産物、原始生産物の比はほぼ6:3:1である。

これに続けて『明治前期産業資料集成(第1巻)』から愛知県の物産表を第1表の区分と同様に整理すると以下(第3表)の通りである。愛知県の総生産額は1,524万8,937円(ただし、第3表の農産物、工産物、原始生産物の合計とは一致しない)である。全国の生産額に占める割合は約4%である。農産物:工産物:原始生産物の比は、6.3:3.2:0.5で農産物と工産物において全国比よりも高く、原始生産物は約半分となっている。農産物では米が55%で全国の61%よりもかなり低く、綿類が12.5%とかなり高いのが特徴である。工産物では清酒、味噌・醤油などの醸造物類が47.1%を占める。原始生産物では

第2表：「明治七年府県物産表」の主要生産物価格

農産物		工産物		原始生産物	
総額 (61.0)	227,287 (100)	総額 (30.0)	111,892 (100)	総額 (9.0)	33,129 (100)
米	142,799 (62.8)	酒類	18,605 (16.6)	魚介類	6,984 (21.1)
麦	25,703 (11.0)	織物類	17,159 (15.3)	薪類	6,042 (18.2)
芋・蔬菜類	11,658 ( 5.1)	醤油	6,338 ( 5.7)	皮葉類	3,092 ( 9.3)
雑穀類	8,703 ( 3.8)	生糸類	6,165 ( 5.5)	牛類	2,778 ( 8.4)
棉類	7,435 ( 3.3)	味噌	6,137 ( 5.5)	馬類	2,689 ( 8.1)
大豆	7,405 ( 3.3)	油類	5,443 ( 4.9)	炭類	2,273 ( 6.9)
菜種	6,037 ( 2.7)	紙類	5,168 ( 4.6)	金銀銅鉄類	2,243 ( 6.8)
繭	4,917 ( 2.2)	製茶	3,951 ( 3.5)	禽獣類	1,634 ( 4.9)
藍	3,422 ( 1.5)	諸機械類	3,061 ( 2.7)	玉石鉱土類	1,566 ( 4.7)
煙草	2,940 ( 1.3)	肥料類	3,057 ( 2.7)	竹類	623 ( 2.1)

単位：1,000円 (%)

出所：長岡新吉編著『近代日本の経済』ミネルヴァ書房，1988年，4頁。

第3表：明治7年の愛知県の主要生産物価格

農産物		工産物		原始生産物	
総額 (63)	9,610,611 (100.0)	総額 (32)	4,895,776 (100)	総額 (5)	742,451 (100)
米	5,300,914 (55.1)	醸造物類	2,307,216 (47.1)	魚類	438,981 (59.1)
綿類	1,210,065 (12.5)	縫織物類	832,162 (17.0)	木材類	124,719 (16.8)
麦	1,070,532 (11.1)	油類	224,944 ( 4.6)	馬類	60,859 ( 8.2)
雑穀類	600,212 ( 6.2)	食物類	218,503 ( 4.5)	禽獣類	29,520 ( 4.0)
園蔬類	553,282 ( 5.7)	木綿糸類	150,500 ( 3.1)	牛類	24,624 ( 3.3)
種子類	433,772 ( 4.5)	肥料類	139,749 ( 2.9)	皮葉類	21,590 ( 2.9)
小麦	187,163 ( 1.9)	雑貨玩具類	118,437 ( 2.4)	玉石礦土類	16,441 ( 2.2)
染料類	130,052 ( 1.3)	桶樽類	112,388 ( 2.3)	甲貝類	12,102 ( 1.6)
穀質澱粉類	61,497 ( 0.6)	諸機械類	112,063 ( 2.3)	竹類	6,662 ( 0.9)
果実類	19,351 ( 0.2)	陶器類	111,522 ( 2.3)	植物類	3,259 ( 0.4)

単位：円

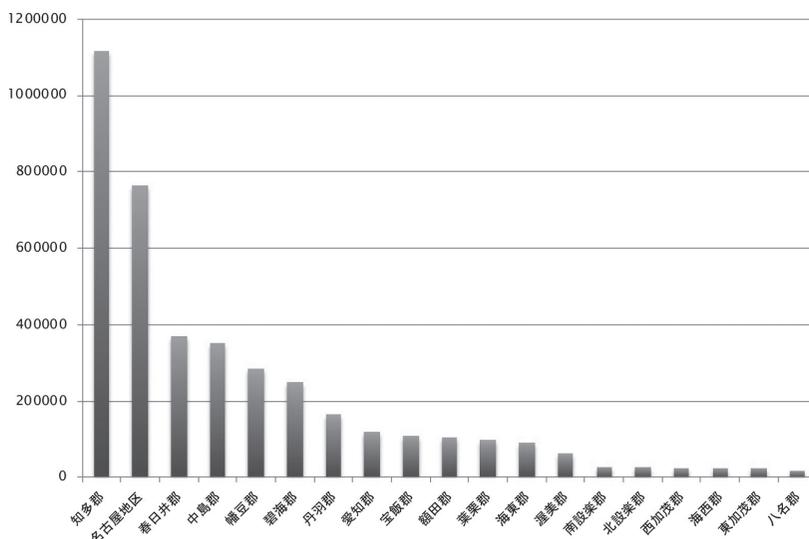
出所：「明治7年府県物産表」『明治前期産業発達史資料（第1巻）』明治文献資料刊行会，1959年より作成。

魚類が6割近くに達している。これらは全国平均に比べてかなり高い数値となっている。農産物や原始生産物の一部は工産物の原材料になっている様子が見えてくる。

山口和雄，前掲書によれば，愛知県の米の生産額は5,300,914円で全国第6位，同じく麦（大麦・小麦）は1,257,695円で第3位，綿は1,210,065円で第2位，菜種は404,511円で第1位，藍（葉藍・藍玉）は130,052円で第5位である。工産物では綿織物は751,422円で大阪などについて全国第3位，綿糸は150,500円で全国第3位，醸造物類のうち酒類生産量は1,465,639円で兵庫県に次いで全国第2位，同じく醤油は第4位（314,082円），味噌は第3位（308,774円）であった。

この他，陶器は岐阜県について全国第2位（72,905円），瓦は全国第4位（38,617円），桶樽は兵庫県に次いで全国第2位（112,388円），車両類は東京，大阪について第3位（21,208円）などとなっていて，愛知県は，醸造業，綿・綿織物業，その関連産業および窯業については全国有数の生産額を誇っていた。さらに畑作物の肥料となる大豆・菜種などの油粕は全国第2位（81,847円），同じく知多半島周辺で取れる干鰯などの原料となる鰯の漁獲量は全国第1位（273,553円），木材は全国第4位（124,719円）であった。

なお，1879（明12）年の愛知県工業生産額を『愛知県史（資料編29近代6工業1）』（2004年）により



第1図：地区・郡別工業生産額

単位：円

出所：『愛知県史』（資料編29近代6工業1）1～27頁。

郡別にみると第1図のようになる。最も生産額が大きいのは知多郡で約1,117,000円（総生産額4,041,000円に占める割合27.7%）、内訳は清酒58%、木綿28%、味噌・味噌溜7%、酢4%などであった。これに次ぐ名古屋の生産額は765,000円（同18.9%）、内訳は木綿32%、味噌・味噌溜22%、酒類17%、扇9%、七宝焼5%などであった。第3位の春日井郡は約369,000円（同9.1%）、内訳は陶磁器68%、酒類19%などである。これに対して、東三河地域の総生産額に占める割合を郡別にみると、宝飯郡2.71%、渥美郡1.54%、南設楽郡0.70%、北設楽郡0.65%、八名郡0.48%で、合計しても6.08%で1割にも満たない状況であった。ちなみに、渥美郡の生産額は約62,000円、内訳は清酒44%、味噌・味噌溜24%、木綿8%、桶類8%、生糸7%などであった。

このように、愛知県は明治の初期においてすでに米、綿、大豆、藍の農産物の生産量や鰯漁獲量を背景として、尾張地域を中心に酒、味噌、醤油といった醸造物類や綿織物などについては、日本有数の生産県であったと思われる。こうして蓄積された富や技術はその後の中京地域が日本最大の工業地帯に発展していく要素の一つとなったと考えている。

## （2）地域政策学部時代

2011年に地域政策学部がスタートした。主要担当科目は、日本経済史、地域産業史、ゼミナールの他に、新たに企業発展論（内容は戦後日本経営史）が追加となった。経済学部時代のゼミナールと地域産業史の経験と授業内容は、地域政策学部でもそのまま踏襲することができた。地域産業史については、その後、前掲『愛知県史』の資料編、通史編6近代1（2017年）が利用できるようになり、中西聡『地方からの産業革命』（名古屋大学出版会、2010年）、北見昌朗『愛知千年企業（明治時代編）』（中日新聞社、2013年）、宮地英敏『近代日本の陶磁器産業』（名古屋大学出版会、2008年）なども刊行されて、これらの研究業績も取り入れることができるようになってきている。

一方、地域政策学部でのゼミナールについても、経済学部時代のスタイルを踏襲することができた。その後、2年次のゼミもスタートしたこともあって、同学年の学外の正課授業や外部講師の招請も多くなった。とはいえ今回は、3、4年次の調査合宿にしぼって思い出せる範囲で表にまとめ、それについて若干コメントして終わりにしたい。ゼミナール活動については、大きく3つの変化があった。一つ

第4表：地域政策学部時代の夏春合宿の工場見学先（3年・4年）

年度	テーマ	訪問先
2013	三河地域の伝統産業・伝統工芸	高山工房（豊橋筆），古久根（鋳物，碧南），常滑窯業技術センター 三河窯業試験場，丸栄陶業（三洲瓦，碧南），磯部ろうそく店（岡崎）， 愛知屋仏壇本舗（岡崎），岡崎石工団地協同組合
2014	3年 東三河・遠州地域の施設農業	石井農場（スプレー菊，田原），イシグロ農材総合試験農場（田原）， 田原めっくんハウス（道の駅），トヨハシ種苗，三ケ日農協協同組合 （みかん，洋蘭），マルワ農園（ぶどう，浜松），ガーベラパッキング センター（浜松）
	4年 東三河地域の先端技術企業	宮川工機（豊橋），竹本油脂（蒲郡），本多プラス（新城），オーエス ジー（豊川），本多電子（豊橋），樹研工業（豊橋）等
2015	3年 再生可能エネルギーと地域の再生	飯田市役所市民協働環境部環境モデル都市推進課，おひさま進歩エ ネルギー，飯田信用金庫等
	4年 三河・遠州地域の施設農業	リーフ（胡蝶蘭，豊橋），サンテパルク（道の駅，田原），サイエン スクリエイト，大仙（温室建設，豊橋），JA 西三河，西尾茶協同組 合，あいや（西尾）等
2016	3年 西遠・東三河の再生可能エネルギーの取組み	浜松市役所，浜松市ゴミ処理場，電気堂，田原市役所，蔵王山展望 台，磐田市の風力発電事業，湖西市役所，奥浜名湖等
	4年 再生可能エネルギーと地域の再生（続）	会津電力（喜多方），喜多方市役所，大和川酒造（喜多方），豊根村 森林組合，同木質チップ工場等
2017	3年 新潟県の6次産業化・神奈川県の6次産業化	柏崎原子力発電所，加勢牧場（ガンジー牛のジェラート，ケーキ）， 中村農園（茶豆，豆腐），魚沼の里（八海山酒造）・ラーメン博物館 （横浜），竹房丸宮川聡（たこのアヒージョ，横須賀）等
	4年 西遠・三河の再生可能エネルギーの取組み	新城市役所，豊川市役所，岡崎市役所，西尾市役所クリーンセン ター，おひさま自然エネルギー西尾市民ソーラー発電所（西尾），湯 谷温泉等
2018	3年 福井県の6次産業化・長崎県の6次産業化	長崎県庁農産加工流通課，土井農場（諫美豚），諫早直売処（高来そ ば），原爆資料館，グラバー邸等・福井県庁農政課，石井農場（里芋 アイス），美浜町漁業協同組合（へしこ），永平寺，めがね博物館等
	4年 淡路島・小豆島の6次産業化	長坂養鶏場（養鶏，卵プリン，淡路島），うずしお（道の駅），井上 誠耕園（オリーブ，小豆島），小豆島オリーブ公園，讃岐うどん店等
2019	3年 北海道の6次産業化・沖縄の6次産業化	帯広市役所（フードバレー十勝），加藤牧場（ジャージー牛），大野 ファーム（肉牛），JA めむろファーマーズマーケット，帯広屋台村， 美瑛町等・内閣府沖縄総合事務所（6次産業化担当）
	4年 伊豆の6次産業化	パイナップルパーク，沖縄博物館，美ら海水族館等 堤農園（わさび），葎山反射炉，農家カフェ&レストラン風の詩，グ ランバルコート（道の駅），天城越え（道の駅），伊東マリンタウン （道の駅）等

は2015年までは報告書の作成を継続したが，種々の事情により2016年度以降は作成できなくなったこと。2つ目は，2016年から調査地をそれまでの三遠南信地域を超えて，会津，新潟，四国，福井，長崎，北海道，沖縄，伊豆などへ広げたことである。これはゼミの研究を地産地消や6次産業化の取組みなどへ広げたこととも関連している。3つ目は，合宿ではなるべく観光的な活動も取り入れるようになったことである（第4表）。観光客が集まる場所には，その地域の特産品や6次化商品が並べられて

いることが多く，それぞれの地域の特徴を反映していることが多いからである。また，学生たちと地域の博物館を見学したり，その土地のお菓子を食べたり，食事をすることも地域理解にとって重要なことだと思えるようになったからである。

なお，愛知大学に赴任直後から，中部地方産業研究所の所員として同研究所のプロジェクト研究，産業見学会，中産研セミナー，地域・産業・大学研究助成，生活産業館の整備，『年報・中部の経済と社会』や5年に1回刊行される『東三河の経済と社

会』の刊行に参加してきた。同研究所でのこれらの研究活動は、ゼミナールや地域産業史だけでなく、地域政策学部で新たに始まった企業発展論等の教育活動に大いに役立った。とくに記憶に残るのは2006年頃から中産研のプロジェクト研究（一部、愛知大学研究助成）で合計7年間にわたって行った中部地域企業の海外進出についての調査で、中国（北京、天津、広州、上海、瀋陽等）、ベトナム、タイ、インドネシア、インド、台湾等の日系企業を訪問し、そこで働く人たちにインタビューしたこと、同じく陶磁器産地をテーマに日本各地の産地を回り、産地の衰退とその再生について関係者の意見を聞いたこと、地域・産業・大学の助成を利用して浜松地域の伝統的産業である別荘・コール天産業の調査を行い、その後も関係を持たせていただいて生産活動の様子をビデオ映像に残したこと、生活産業館に保存されていたガラ紡の動態展示にかかわったこと、中産研セミナーをきっかけとして豊橋の特産品である帆前掛けを利用して大学名入りのトートバックを作成して販売したことなど数え切れない。

中産研の活動とは別に大阪経済大学の中小企業・経営研究所の「グローバル化と地域」（代表：伊藤裕人氏）をテーマとしたプロジェクト研究の一員に加えていただき、10年近くにわたって、北は北海道から南は九州まで調査活動を行ったことも貴重な経験となっている。とくに石炭生産が終了して、今は寂れてしまった全国ほぼすべての旧産炭地の調査とその廃坑跡、石炭博物館等の見学は印象に残っている。今は廃屋となった炭鉱者用の住宅団地やその周辺を回って、地域が廃れていくというのはこういうことなんだと実感した。話は変わるが、日本で唯一、坑内掘石炭生産を行なっている釧路コールマイン（株）を訪問した時は、炭鉱の作業着に着替えてヘルメットをかぶり、トロッコで坑内深く降りた。それから地下300メートルの坑内を1時間ほど歩いて切羽での機械掘を見学させていただいた。見学後、炭鉱労働者用のプールのような浴場を利用させていただいたことも忘れられない体験となっている。とはいえ、何と言っても旧産炭地で地域再生に向けて活動している人たちとの出会いは私の心の財産の一つになっていると思う。

## おわりに

以上、雑駁ではあるが地域産業についての教育・研究と私について記述してみたが、考えてみるといくつもの幸運に恵まれていたのではないかと思う。新学部が地域政策学部であったこと、中部地方産業研究所や総合郷土研究所などにみられるように愛知大学での地域研究がさかんであったことはもちろんである。しかし、何よりも恵まれていたと思うのは、地域産業についての教育・教育に際して、地域の人々や企業が非常に協力的で、時間を惜しまずに学生たちに対応して下さったことである。このことには本当に感謝しなければならないと思っている。また、ゼミナールに関しては学生たちがアポイントをとり、現場をとりしきり、テープを起こすなど大変な作業をこなしてくれたおかげもある。そうした学生諸君にも感謝したい。

私の大学生生活も残り少なくなりつつある。地域産業史をテキストとしてまとめることも考えていたが、もはやそれも叶わなくなった。残された期間もゼミナールでの調査活動を継続し、地域産業史の内容もバージョンアップもしていきたいと思う。ただし、2019年度末以降、新型コロナウイルス感染拡大のために調査合宿をはじめとしてほとんどの活動がストップしている。また再開できる日が来ることを願うばかりである。

